

場に「いる」ことを支える「あいだ」

—路上生活者との関わりに根ざして—

田 口 楓 真

1. はじめに

本稿では、路上生活者とボランティアとしての筆者との実際の関わりを、木村敏の「あいだ」に関する思索に依拠しながら考察することで、支援者と被支援者としての関係に先立つ「人と人との関係」のあり方と、支援の目指す方向性に先立つ「場にいること」について考える。

1-1. 「ホームレス問題」の現況

近年、「ホームレス支援」をめぐる議論の焦点は、「ホームレス状態をいかに解消するかという点」から、「アパートなどでの生活に移行した後に生じる問題」に移行している（山田 2020、11頁）。2000年代以降、路上生活者に対する生活保護の適用が進んだことで、見かけ上の路上生活者数が減少した一方、福祉制度の利用後に路上生活に戻る「再流入層」や、福祉制度を利用せずに長期間路上生活を続けている「長期層」の存在が指摘されるようになった（岩田 2013）。生活保護の適用や住居の提供だけでは、支援策として不十分であることが浮き彫りとなった昨今、「ホームレス問題」は、「いかに地域生活への移行を進めるか」という課題に直面している。

このことは、経済的困窮に起因する住居の喪失状態としての「ホームレス」観に変容を迫る。すなわち、岩田が述べるように、「ホームレス」は「家を失う（ハウスレス）」ということだけでなく、ある人が社会の中で、そのメンバーとして生きていく定点（＝ホーム）を失う」（岩田 2017、248頁）状態として捉えられる必要がある。岩田の「ホーム」の定義からさらに踏み込んで、熊倉・清野は、「安心して休んだり頼ったりすることのできる居場所や、心理的な『居場所感』」（熊倉・清野 2019、197頁）として「ホーム」を捉えている。このように「ホームレス」は、経済的困窮だけではなく、社会的孤立や居場所の喪失として捉えられるようになっていく。

しかし、本稿の観点からいえば、岩田や熊倉・清野の「ホーム」観は、未だそれを「定点」や「居場所」という「もの」として捉えている点で不十分である。「ホーム」は、ものとしての「住まい」や「居場所」を可能にしている、「住まう」あるいは「いる」ということとして捉えられなければならない。それは、まさに「居場所感」（傍点筆者）としかいいようのない、「もの」として対象化することの困難な「こと」の動態である。したがって、前述した「いかに地域生活への移行を進めるか」という課題は、「人が場にいることがいかにして可能となるか」という問題に読み替えられる。

以上の観点到った時、近年の路上生活者支援の方策は、「住まうこと」や「いること」をめぐる問題に着眼しつつあるといえる。例えば、近年注目されている「ハウジングファースト」という方策は、「もの」としての住居の提供後も、当事者が必要とするケアが継続される点に特徴がある。熊倉・森川によれば、入居後の「共感的に接する支援者や隣人との関わり」のなかで、当事者において「自然と回復への道がひらかれていく」（熊倉・森川 2018、27頁）。この「自然と」という表現は、「もの」として明確に論じることが困難な「こと」の動態を的確に表している。また、「共感的」と表現される支援者や隣人の接し方からは、支援者と被支援者としての関係に先立つ、より根源的な人と人との関係を窺うことができる。

しかし、ここでは「自然と回復への道がひらかれていく」ことがいかにして可能となるか、及び「共感的」な接し方とは具体的にどのような関わりのある方を指すかという問題が、これ以上深められることはないまま、「支援」や「ケア」のなかに回収されてしまう。本稿では、このように近年の路上生活者支援の方策が垣間見ている「場にいること」や、それを支える「人と人との関係」について、「支援」や「ケア」の文脈からは一旦切り離しながら、それ

らがそれら自体としてどのようなあり方をし、どのようにして可能となるかを考えたい。

1-2. 「あいだ」と自己／他者生成

「場にいること」を生み出し、人と人との関係を可能にしているのが、木村敏が「あいだ」と呼ぶ次元である。「あいだ」とは、私にとっても他者にとっても「それぞれの自己がそこではじめて自己となりうるような場所」（木村 2001a、393頁）である。ここで注意する必要があるのは、すでに確立された自己と他者との間に生じる相互性や一体性が「あいだ」と呼ばれるわけではないことである。そうではなく、未だ自己も他者もないような「あいだ」から、自己と他者とが同時に、等根源的に生成される。

この生成というあり方が「ノエシ的」と呼ばれる。「ノエシ的」とは、「けっして『もの』として対象化することのできない純粋な事態、あるいは純粋に『こと』としてのありかたにとどまっているような出来事」（同、341頁）を指す。一方、「意識の内容として、志向の対象として、われわれに気づかれたかぎりでの『もの』のありかた」が「ノエマ的」（同）と呼ばれる。例えば、私たちが通常意識している「自分」というものは「ノエマ的自己」である。一方、それを支える自分であることは「ノエシ的自己」である。

自己とは、このようなノエシ的自己とノエマ的自己との間の「動的な過程」（木村 2001b、59頁）のことである。それは、ノエシ的自己がノエマ的自己を「析出」しながら、自ら析出したノエマ的自己を「媒介としてそれ自身をノエシ的自己として自己限定する」（同、傍点原文）過程である。すなわち、その源泉である「あいだ」において、無限定な自他未分の状態にあるノエシは、有限なノエマ的自己を析出しながら、それを通じてノエシ的自己として限定される。

以上の過程を経て私たちの自己が成立した後も、「身体感覚的次元における自他未分離の原初的一体性」は、「つねに存続していて、意識が経験するすべての対象認知を背景的に『気分づけて』いる」（木村 2001a、354頁）。つまり、私たちの認識作用は、それに先立つ「気分的な自他未分の感覚」（同）に支えられている。この「気分的な自他未分の感覚」は、「あいだ」という根源的な次元が、身体性という原初的ノエマ性を帯びることで表出し、「ノエシ

的方向性として直接的に感じとられうる」（同）。逆に、私たちは「あいだ」を直接認識したり、感受したりすることはできないが、ノエシ的方向性の感受を通じて、間接的に「あいだ」に触れている。以上を踏まえ、以下では、私たちがノエシ的方向性を感じとる仕方を「感受」、私たちがノエシ的方向性の感受を介して「あいだ」へと関わる仕方を「触知」ⁱと表記する。

このように、私たちはノエシ的方向性、すなわち意識を背景的に支える「気分」の感受を介して、「あいだ」に触知している。触知は感覚にも認識にももたらされないため、本来それを描くことはできない。しかし私たちは、私たちが感受している「気分」を探求することで、「あいだ」を描き出すことができるはずだ。この「あいだ」に立って路上生活者との関わりを振り返ることで、支援者と被支援者としての関係に先立つ「人と人との関係」のあり方が見えてくるのではないか。また、「あいだ」による自他生成に注目することで、その目指す方向性が、例えば「職業に就くこと」や「住居に住むこと」などに限定された「支援」に先立つ、路上生活者の多様な「変容」の可能性が開かれるのではないか。同時に、その対象が路上生活者に限定された「支援」に先立つ、路上生活者及び彼らと関わる支援者やボランティアの双方の「変容」が見えてくるのではないか。このように相手と私の双方の多様な「変容」を生み出すノエシとノエマとの間の動的な過程こそが、私たちが「場にいること」そのものではないか。

以上の観点に立って、次章では、路上生活者との実際の関わりの中かで、筆者や他のボランティア参加者が感受する「ノエシ的方向性」や「気分」に注目しながら、両者の関係性やあり方を「あいだ」に根差して描きたい。「あいだ」は、支援者か被支援者か、あるいは路上生活者かそうでないかを問わず、その場に居合わせる者全員を等根源的に生成する。この点を強調するため、次章では、「支援」や「ケア」の文脈では注目されることの少ない、ボランティアにとっての「場にいること」を中心的に描く。

2. エピソードの検討

2-1. 研究方法とフィールドの概要

本稿は、筆者が参加しているボランティア活動の

なかで生じた、路上生活者と筆者との実際の関わりをエピソードとして記述し考察するという方法を採用ⁱⁱ。ただし、2～3に限り、活動に参加するボランティアの山上さんの手記ⁱⁱⁱを題材に考察を進める。エピソード及び手記は、すべて路上生活者の安達さんとの関わりを描いたものである。一人の路上生活者との継続的な関わりに注目することで、互いの変容の過程や、場に居合わせるそれぞれのボランティア参加者の多様なあり方を描くことができる。

最初に、ボランティア活動の内容を簡単に述べる。私たちは週に1度、3～8名から成るグループに別れてA駅周辺を歩き、出会う路上生活者に声をかけて回る。特に支援物資等を提供するわけではないが、互いの出会いのきっかけとして、コップ1杯程度の飲み物やスープを相手の路上生活者に渡すことが多い。相手の反応は様々で、コップ1杯程度の飲み物やスープを、それでも「支援物資」として受け取る（あるいは「支援物資」であるために拒否する）場合もあれば、スープは二の次で数十分から1時間にわたって会話が続く場合もある。ボランティアの参加の仕方も多様であり、固定のメンバーを有していない。そのため、活動の参加歴や参加頻度、相手の路上生活者との関係性は、参加者によって様々である。このように私たちの関わりは、相手の路上生活者と私たちのその時々状況に応じて可変的・流動的であり、そのことが多様な関わりのあり方を用意している。

2-2. 安達さんについて

安達さんは、エピソードを記録した当時（2023年夏～秋）、A駅から少し離れた公園で暮らしていた。年齢は60代で、長く伸ばした髭が印象的な方だ。私たちが訪れると、自然と安達さんを含めた輪が広がり、数十分～1時間にわたって会話が続けられる。場のなかに初めて活動に参加した年齢の若いボランティアがいると、安達さんは決まって「何、何かやりたいことは決まってるのか？」と、方言混じりの口調で参加者の進路を尋ね、「何か〔資格を〕取った方がいいよ」「親とは仲良くしたい方がいい。いなくなってからじゃ遅いから」などとアドバイスする。言葉遣いが独特であるうえ、ところどころ主語や目的語が抜けているので、安達さんの話の内容は理解しづらい。しかし、こちらに語りかける安達さんの真っ直ぐな眼差しは、初めて参加したボラン

ティアに強く印象づけられることが多い。

かくいう私も、安達さんの真っ直ぐな語りかけに魅かれて活動に継続的に参加するようになった。私が安達さんに会ったのは、約5年前、私が活動に参加し始めて間もない頃だった。その頃安達さんは、生活保護を受給して入居していたアパートから、次第に足が遠のくようになっていた。当時の安達さんは、「隣のやつが夜中にうるさいと文句を言ってくる」と、アパートでの生活に強い不満を見せていた。初めは一晚公園で寝泊まりするだけだったが、次第に頻度が増えていき、最終的に安達さんは、アパートに籍を置いたまま公園で暮らすようになった。

それから4年が経ち、アパートの取り壊しが決まると、安達さんは再びアパートをめぐる問題に巻き込まれていった。飼ひ猫の「キーちゃん」と一緒に暮らすことが安達さんにとって譲れない条件だったので、転居先のアパートはなかなか見つからなかった。これから描かれるエピソードや手記は、以上のような状況下での安達さんとの関わりを記録したものである。

2-3. 場に「いる」ことを支える「気」

本節では、ボランティア参加者の山上さん（20代）が、安達さんと出会った場面を綴った手記を題材に考察を進める。山上さんは4～5年前にも一度安達さんと会っているが、この場面がほぼ初対面に近い状況である。そのように意識して書かれたわけではないだろうが、山上さんと安達さんをともに支え、包み込むような「気」が手記全体を貫く一つのモチーフとなっている。「気」は、その姿を多様に変貌させながら手記の随所に現れる。本節では、この「気」と山上さんの変容との関係に注目する。

【山上さんの手記】（2023年9月）

四、五年ぶりに参加し安達さんと歩きながら話した時、仕事を辞めてしまったてどうしようか悩んでいるといった内容をつぶやいたところ、安達さんは私の目をじっとみて心の底からそう思っているような強い気を放って言葉をかけてくださった。

安達さんは、まだ暑いのに長袖を着ていて髪も髭も長かった。ガヤガヤした夜のA町を、汗をかいて少ししんどそうにしながらも杖をつい

て力強く歩かれる安達さんと共に、周りよりもゆっくり進むと、街の様子も違って見えた。安達さんが見るA町を見ている気がしたし、人目を感じることはあっても私たちだけ何かから守られているように思えた。

仕事を辞めて迷っていると思わず言ってしまったのは、少し静かな地下の空間に入り、階段下の壁の隅でしばらく立ち止まっていた時だった。安達さんからアドバイスしてもらった内容はすぐに思い出せないが、「自分が苦勞したから、他の人にそういう思いをしてほしくない」と決意するようにおっしゃっていた。その場を持たせるための言動などではなく、ほぼ初対面の私をととても心配しているという様子とも違い、安達さんが経験してきたことから抱いた強い感情を、ゆらぎなく、私に対してぶつけてくれているように感じた。そのような直線的で強い気持ちを他人から向けられたことはなかった。そういうものだと諦めきれずに持て余していた、よりどころのない気持ちが解けるような感覚を覚えた。

以下ではまず、冒頭で山上さんに言葉をかける安達さんが放った「強い気」と、山上さんが抱いた「よりどころのない気持ちが解けるような感覚」に注目しながら、両者の関係を考える。次に、山上さんの経験した「気」の実感をより詳細に検討することで、この場面全体を支える「場の雰囲気」を描き出す。

2-3-1. 強い「気」を放つ

まず、安達さんが放った「強い気」について検討する。木村によれば、「気」は「すぐれて『あいだ』的性格を帯びている」（木村 2001a、399頁）。ここではそれを、「気」が「こと」的性格をもつと理解しておこう。「気」は、自ずと感じられてしまう、そうとしか言いようのない「何か」である。

ところで、この「気を放つ」という表現は、安達さんから山上さんに向けられたある運動を表している。しかし、「気を放つ」という運動は、例えば「ボールを放つ」という運動とは全く質が異なる。「気」が「こと」的性格をもつ以上、「気を放つ」は「ボールを放つ」とは異なり、「もの」の存在しない運動である。「もの」と「運動」とは、まさにノエマとノエシスとの関係にある。すなわち、ノエシスが自

ら析出したノエマによって限定されることで表出するのと同様に、運動はそれが動かす「もの」を伴うことで「運動」として現れる。他方「気を放つ」は、原理的には「もの」の存在しない純粋な運動、あるいは一切のノエマ化に先立つ絶対的なノエシスだといえる。

運動に「もの」が存在しないことは、運動の極を定めることができないことを意味する。安達さんと山上さんという極を定めた場合、どうしても「何か」という運動する「もの」を想定しなければならないが、実際にはこの「何か」は存在しないので、運動の極も存在しない。換言すれば、「もの」の存在しない純粋な運動は、空間上に位置を持たない。

では、純粋な運動、すなわち絶対的なノエシスは、どのようにして山上さんに触知・感受されたのだろうか。その契機の1つが、安達さんにじっと目をみられる経験にあったと考えられる。村上は、「目があってどきっとする経験」に見られるような、「視線やスキニップ、呼びかけが惹起する触発」を「視線触発」と呼ぶ（村上 2008、2頁以下）。視線触発とは、「私のここ」と「あなたのそこ」に局在化する以前の、こちらに向かってくる「ベクトル」である（同、26頁）。それはまさに、極を持たない絶対的なノエシスに他ならない。つまり山上さんは、自身をじっとみる安達さんの目を見つめ返した時、未だノエマ化されていない絶対的なノエシスを触知したのである。

この絶対的なノエシスの場こそが、自他の「あいだ」である。山上さんは、安達さんの目を介してノエシスの源泉としての「あいだ」を触知し、そこから発出される運動を感受した。山上さんにとって、安達さんの言葉かけが「心の底からそう思っているよう」（傍点筆者）に感じられたのは、山上さんが自他の根底としての「あいだ」を触知していたことの証だろう。

ただし「あいだ」は、ノエマ性を帯びなければ私たちに感受されることはない。山上さんは、安達さんというノエマ的他者・身体を媒介としてノエシス的他者を感受した。安達さんの放った「強い気」とは、山上さんが感受した他者のノエシスである。それは、山上さんが実感した「安達さんが現にそこにいること」である。

2-3-2. 「気」持ちが解ける

前項で述べたように、山上さんは、安達さんの目を介して「あいだ」を触知し、他者のノエシスを感受している。しかし、「あいだ」が自己と他者とともに生成する以上、山上さんは、「安達さんが現にそこにいること」として他者のノエシスを実感すると同時に、「山上さん自身が現にここにいること」として自己のノエシスを実感しているはずである。では、山上さんのノエシ斯的自己は、手記の中でどのように描かれているのだろうか。

ここで、山上さんの経験した「よりどころのない気持ち」が解けるような感覚」に注目しよう。「気持ち」とは、「あいだ」としての「気」が個人によって「分有」された様態を表す言葉である（木村2001a、223頁）。「気」を分有することで「気持ち」を表出することは、1-2で述べた「あいだ」を限定することで「ノエシス的方向性」を感受することと同じである。つまり「気持ち」は、私たちの「自己存在感の根底にあってこれを基礎づけているノエシス的方向性」（同、354頁）である。

そうだとすれば、「よりどころのない気持ち」は矛盾を含んだ表現である。「気持ち」は、自己を基礎づけるという意味で、自己の「よりどころ」である。そのため「よりどころのない気持ち」は、ノエシス的方向性としての「気持ち」になりえていない。それは、自己を基礎づける「気持ち」の揺らぎ、あるいは「気持ち」のような仮構物であるといえる。

一方、安達さんと出会った山上さんは、自己の「よりどころ」を確かにした。安達さんの目を介して「あいだ」を触知した山上さんは、「気」を分有し、自らを基礎づける「気持ち（ノエシス的方向性）」を確かにした。自分が自分である「こと」が確かになった時、「こと」の揺らぎを補強していた「よりどころのない気持ち」という「もの」は解かれた。つまり、「よりどころのない気持ち」が解けるような感覚」は、山上さんが感受した自己のノエシスを意味する。それは、山上さんが実感した「山上さん自身が現にここにいること」である。

このように山上さんは、自身をじっとみる安達さんの目を見つめ返した時、「あいだ」を触知し、そこから発出される運動を感受した。それは敢えて言葉にするならば、「安達さんが現にそこにいること」と「山上さん自身が現にここにいること」との同時的、等根源的な実感である。

以上は、「共感」の根源にある経験であるといえる。そうだとすれば、1-1で述べた、支援者や隣人の（元）路上生活者に対する「共感」は、自他が成立する以前の、「あいだ」の触知とノエシスの感受である。それは、確立された自己から他者への感情移入や寄り添いに先立つ。そのため、真に「共感」している時、私たちは相手だけではなく、自分自身が「いる」ことを実感する。また、言語や認識によっては理解しえないような他者に対しても、「あいだ」に巻き込まれる限り、私たちはすでに「共感」している。このように「共感」は、他者を介して「あいだ」を触知することで、言語や認識に先立って、自他が共に「いる」ことを実感する経験である。それは、「人と人との関係」の基底をなす経験である。

2-3-3. 背景的な場の雰囲気「気」

前項まで、山上さんが「あいだ」を触知した契機として安達さんの目を挙げていたが、実際には山上さんは、安達さんにじっと目をみられる以前から、安達さんを介して「あいだ」を触知し、ノエシスを感受している。このことは、手記の中で様々に記されている。

例えば、「安達さんと共に、周りよりもゆっくり進むと、街の様子も違って見えた」という記述に注目しよう。「街」自体は物理的に不変だが、山上さんにとっての「街」の現れは可変的である。そのつどの「街」のノエマ的表象は、ノエシ的に生み出される。変化した街の見え方を、山上さんは「安達さんが見るA町」と表現している。それは、すでに確立された自己の内部における視点の変容ではなく、自己と世界との等根源的なノエシ斯的生成のされ方そのものの変容を表す。換言すれば、安達さんを介して「あいだ」を触知したことで、山上さんが新たに分有した「気」が、「安達さんが見るA町」を見ているような気」と表現されている。同時に山上さんは、「私たちだけ何かから守られているように思えた」という仕方で、安達さんとの一体性を感受している。

このように、手記の中で直接的な主題とはならないが、山上さんの知覚や行為の背景に間接的に見出されるノエシスや「気」のあり方を、「雰囲気」と呼ぼう。「雰囲気」は、前述した安達さんの「強い気」や山上さんの「気持ち」とは異なり、誰の「気」で

あるかが明確でない。それは、自他の成立に先立つ「身体感覚的次元における自他未分離の原初的一体性」である。

このように、山上さんは、安達さんにじっと目をみられる以前から、安達さんを介して「あいだ」を触知し、「雰囲気」を感受している。したがって、前項で論じた自他が「いる」ことの等根源的な感受は、絶えず潜在的に生じているといえる。安達さんの目は、その強度を以って、山上さんに強い仕方でも「雰囲気」を実感させる契機となったに過ぎない。

他方、「雰囲気」が「自他未分離の原初的一体性」である以上、安達さんにじっと目をみられた山上さんが強い仕方でも実感した「雰囲気」は、本来その発生する場所を、安達さんがいる「そこ」や山上さんがいる「ここ」として定められない。その場所は、「そこ」と「ここ」が完全に分離する以前の、自他未分離の一つの「場」である。それは、自己と他者がともに「いる」ことのできる「場」である。ただし後述するように、このような「場」は、あくまで「そこ」と「ここ」に分極化される契機を孕んでいる。そのため、手記を綴るにあたり、安達さんとの出会いが山上さんに意識的に振り返られた時には、安達さんの「強い気」と山上さんの「気持ち」という仕方でも、すでに分極化された自他が描かれたのである。

2-4. 「場」を生み出す声

本節では、安達さんの「強い気」を受けた私が、安達さんにどう反応すればいいかわからなくなった場面を検討する。転居先のアパートをなかなか見つけられずにいた安達さんは、自身の不安定な生活に対する不安や不満を反映するように、若い参加者の進路に対するアドバイスの語気を強めるようになった。私もその例外ではなく、安達さんの強い思いに応えられずに、安達さんに「あっち行け、お前とはしゃべらん、けえれ（帰れ）！」と激怒されたこともあった。以下は、それからおよそ1ヶ月後、私が再び安達さんの真っ直ぐな眼差しに耐えられなくなった場面である。

【気づまり】（2023年9月）

私を含めて4人の参加者で安達さんのもとへ向かう。安達さんは悲痛そうな面持ちで簡易イスに座っている。私は「何かあったんです

か？」と声をかける。かけられた声が私の耳に聞こえると同時に、その言い方では安達さんに「何かあったかじゃないよ！」と怒られるに違いないと察知する。が、安達さんは怒る気力もなさそうに、しかめ面をしながら「2025年に日本が減びるよ」と呟く。「はい」「だから早く〔就職先を〕決めた方がいいよ」「そうですね」。また私の進路の話か、と私はうんざりする。安達さんは私の方を真っ直ぐに向いて、「厳しくなるぞ、仕事がなくなるでな。仕事に就きたくても誰も雇ってくれないでな」と語りかける。「そうですね」「だから、俺は早く決めた方がいいぞって言ったんだ。ほうでないと、日本が減ぶからな」。2年後に日本が「減ぶ」んだとしたら、今さら急いで仕事に就く必要はないのではないかと私は心の中で反論するが、それを口にすることはできない。私を真っ直ぐに見つめる安達さんの眼差しの前で、私はどんな顔をすればいいか分からなくなる。目を逸らしたなら、きちんと話を聞いていないと思われそうだが、真っ直ぐに見つめ返したなら、逆に安達さんの話の内容を素直に受け入れていないことが見透かされてしまいそうだ。かといって、本当に「素直に受け入れる」こともできないので、半分くらい安達さんの目を見つめ返しながら「そうですね」と言うしかない。（中略）

2025年に日本が減びるという話から、アパートが見つからない、コロナワクチンは嘘だと話が広がる。安達さんは、真っ直ぐに私に向かって語りかけ続ける。私は再び安達さんにどう反応すればいいかわからなくなる。緊張が増幅していたちょうどその時、隣にいた参加者の青杉さん（50代）が「ほんとに、ひどい世の中ですよねぇ」と流れるように言った。すると安達さんも、その言葉に安心したように笑いながら「ほんとだよ」と返す。場に綻びが生まれ、緊張は収まった。

以下ではまず、安達さんに真っ直ぐに眼差された私において、「気づまり」が生じていることを明らかにする。次に、青杉さんの発した「ほんとに、ひどい世の中ですよねぇ」という声が、つまっていた「気」を流したことに注目しながら、私たちがともに「いる」ことのできる「場」を生み出す声につい

て考える。

2-4-1. 「気」がつまる

前述したように、私たちは他者を介して「あいだ」を触知し、そこから絶えず自己を取り戻し続けることで、自己を成立させている。とりわけ他者の目は、その強度を以って、「あいだ」を触知する媒介となる。

エピソード内で「私を真っ直ぐに見つめる」安達さんの目も、同様に、私に強い仕方で「あいだ」を触知させる。このとき私は、そこから「目を逸らす」ことも、逆に「真っ直ぐに見つめ返す」こともできず、「どんな顔をすればいいかわからなくなる」。

私たちが相手から目を逸らすのは、相手の目の強度に耐えられないためである。相手の目は、私たちを「あいだ」の渦に巻き込む。私たちの自己は、そこから自己を取り戻すために、「あいだ」に巻き込まれることを必要としている。しかし、「あいだ」に強く巻き込まれるあまり、そこから自己を取り戻すことができなくなってしまえば、自己は成立しえない。自己が自己でいられなくなる臨界点で、私たちは相手から目を逸らす。

逆に、私たちが相手の目を真っ直ぐに見つめ返すことができるのは、相手の目の強度が無化されるためである。すなわち、相手の目の奥で触知される「あいだ」を消去し、「こと」ではなく「もの」として相手の目を捉える姿勢が、真っ直ぐに見つめ返すことである。このとき、自己が「あいだ」に取って代わられることはない。

したがって、安達さんの眼差しから目を逸らすことも、真っ直ぐに見つめ返すこともできない私は、否が応でも、安達さんの目、すなわち「あいだ」に巻き込まれざるをえない。このとき私は、「どんな顔をすればいいかわからなくなる」という仕方、自己を自己として実現することに支障をきたす。このような事態を、木村が症例として引いている「分裂病者」は、「気づまりで間がもたない」と表現している（木村 2001a, 399頁）。ここでの私においても、同様に「気づまり」が生じている。つまり、自己として生み出されるべきはずのノエシス（気）が、自己という到達点を失ってつまってしまう。

2-4-2. 「気」が流れる

私に生じていた「気づまり」は、その後、青杉さ

んが発した「ほんとに、ひどい世の中ですよねぇ」という声によって解消された。青杉さんの声がノエシスの到達点として生み出されたことで、つまっていた「気」が流れ、未分化なノエシスが自他に分化されたのである。

分け隔てられた自己と他者の「間」は、エピソードの中で「場」に生まれた「綻び」と表現されている。ここでの「場」は、2-3-3で述べた、自他未分離の一つの「場」と同じである。2-3-3では、それを自己と他者がともに「いる」ことのできる「場」であると述べたが、「綻び」が生まれる以前の「場」に、すなわち「気づまり」が生じている「場」に、私は「いる」ことができていない。むしろ、青杉さんの声によって「場に綻びが生まれ」たことで、私は「場」に「いる」ことができるようになる。つまり、自他未分離の一つの「場」は、自己の「ここ」と他者の「そこ」に分極化することで、はじめて、自他がともに「いる」ことのできる「場」になる。その意味で、「場」は「綻び」を必要としている。

このように、自他がともに「場」に「いる」ことは、自他の分極性と未分性との間にある。もちろん、自他の分極化、延いては自他が「いる」ことは、自己の意識や能動性に依らない。むしろ分極化は、「気」の流れに身を任せることである。だからこそ、青杉さんが「流れるように」発した声が、私にとって他者の確立と、それによって引き起こされる自己の確立を意味した。自他未分離の「あいだ」からノエシス的に生成されるとき、自他は自ずと分極化される。むしろ、ノエシスの生成に不具合が生じたとき、安達さんの眼差しの前で「どんな顔をすればいいかわからなく」なった私のように、自己（他者）というものが意識される。

2-4-3. 眼差しと声

ではなぜ、青杉さんは「気」の流れに身を任せ、自他を分極化するような声を発することができたのか。ここで、安達さんが終始私に向かって語りかけ続けていることに注目しよう。私は、私を真っ直ぐに見つめる安達さんから逃れることができずに「気づまり」を生じさせる。このとき青杉さんは、私と安達さんの見つめ合いの外にいる。そのため、青杉さんは私と同じようには「気づまり」を生じさせていない。

このように、二者関係で生じる見つめ合いは、三者以上の関係では必然的にその外部を生じさせる。ただし、「場」に居合わせた者全員が同じ一つの「あいだ」から生成されている以上、見つめ合いの外は「場」自体の外部ではない。すなわちそこでは、一対一の見つめ合いと、その外部との二層の「場」が生成されている。前者が眼差しを通じた「場」であるのに対して、後者は声を通じた「場」である。すなわち、安達さんの目が、同時に複数人を眼差しすることができないという意味で、私と安達さんの二者関係を前提とするのに対して、安達さんの声は、私以外の他の参加者にも聞き届けられるという意味で、三者以上の関係に開かれている。

ところで、安達さんの眼差しを形容する「真っ直ぐ」とは、眼差しの強度を表している。前節の議論を踏まえるならば、それは、安達さんを介して私が感受している運動の純度である。そこには自他の隔たりが存在しない。「真っ直ぐ」な眼差しは、限定された一者に直接的に応答を要請する。しかし、ここでの私のように、その強度（純度）に耐えられず、相手に応答することが困難になると、二者関係は膠着する。

一方、青杉さんの声は、「真っ直ぐ」とはしておらず、むしろ「流れるよう」だった。声は、「もの」としてノエシスを媒介することで、運動の強度や純度を低める。「もの」が介在することで、運動は屈折し、分散する。声は、運動を分散することで、自他の隔たりを生み出す。同時に声は、それに応答する者を限定しないという仕方で、三者以上の関係を開く。

したがって、ここでの青杉さんが声を発することができたのは、青杉さんが、眼差しを通じた安達さんとの二者関係ではなく、声を通じた三者以上の関係に身を置いていたためだといえる。青杉さんは、私と安達さんとの見つめ合いの外で、「あいだ」に過剰に巻き込まれることなく、絶えず自他を生成し続けていた。そのため、正面から向き合うことで安達さんに応答しきれなくなった私とは対照的に、青杉さんは「斜め」から安達さんに応じ、「気」を受け流した。青杉さんの声という応答は、再びそれに応答する者の複数性を開く。この時安達さんは、私との二者関係から解放されたかのように笑った。このように「流れるよう」な声は、「真っ直ぐ」な眼差しとは異なる仕方で、場に「いる」ことを可能に

する。

2-5. 過去と未来を生み出す「場」

本節では、安達さんの語りの変化に私が感動した場面を検討する。2-4の【気づまり】から数週間後、安達さんは社会福祉を専攻している参加者の大学生に、「福祉なんてバカしかいないよ！ バカのやることだ！」と声を荒げるなど、自身の不安や不満を、若い参加者の進路にますます反映するようになった。その後、アパートは取り壊しの日を迎え、住所を失った安達さんは、一時宿泊施設（安達さんは「寮」と呼んでいる）に入居することになった。入居後も、以前と同じ時間帯・場所で、安達さんとの関わりは続いた。以下は、入居から数週間後、普段のように安達さんが若い参加者に資格を取るよう勧めた場面である。

【俺が資格がなくて苦労したんだ】（2023年10月）

安達さんがいつものように、初めて参加する学生に進路を尋ね、資格を取るよう勧める。「福祉〔の資格〕はダメだけだな」「それ、最近言うようになりましたよね。前は聞かなかったから」と、参加者の坂寄さん（50代）が笑いながら、チクリと刺す。そうやって口を挟めるようになったこと自体に、私は安達さんの変化を感じる。以前はそんな余裕はなかった。そんな坂寄さんの言葉を受けるように、参加者のユウキさん（20代）が、「あの、どうして福祉じゃダメなんですか？」と安達さんに尋ねる。そのゆらゆらとした質感とは逆に、問いかけはとても真っ直ぐとしている。「これがもらえねえからな」。安達さんはいつものように指を丸めて「お金」のジェスチャーをしながら、しかし以前とは違い、笑ってそれを口にする。「資格がなかったら、こき使われるだけだからね」。言っている意味が分かるか、と試すような口調だ。うんうんと頷く。安達さんが「こき使われ」てきたのだらうと察せられる。「何もなかったら、雇い主にこき使われるだけだ、へえ資格があれば、自分でやってけるでな」「あー」「俺は取れなかったでな。そういう学校に行ってなかったから。中学出て、高校は行かずに、そのままだったで。普通の学校じゃなくて、あの、特別な学校だったしな」「うん」「あれ、特殊学級だっ

たで、ほれで、俺の場合は取りたくても取れなかったんだ」。目を細めながら、静かにポツポツと語られる。皆が静かに安達さんの言葉に聞き入っている。「だから俺は、資格が取れる学校にいるんだったら、取った方がいいよって言うんでな。取ってたらこき使われずに済むでな」。安達さんは優しい目をして、私や初めて参加する学生を見つめる。聞いている相手を捕えるような鋭い目ではなく、逸らす隙があるが、だからこそ逆に見つめたくくなるような朗らかな目だ。

私は驚いた。安達さんはこれまで毎週欠かさず、若い参加者に資格を取るよう勧めてきた。しかし、安達さんが自身の経験として「資格」について語ったことは、私の知る限りこれまで一度もなかった。私は驚くどころか感動すらして、何か心が満たされるような感覚だった。坂寄さんが「そうやって言ってくれたら、きっとみんなにも伝わると思いますよ」と言った。私はうんうんと、大きく強く頷いた。もう4年以上の付き合いになるのに、私はまた安達さんに出会い直したような気がして嬉しかった。安達さんの言葉と、それを語っている時の優しい微笑みに、私自身が、ほんの少しだけれど、奮い立たせられるのを感じていた。

以下ではまず、安達さんの語りを聞いた私がなぜ感動したのかを検討する。次に、私の感動が、それ以前の私の安達さんとの関わり方の記憶と、それ以降の私の安達さんとの関わり方の変容を伴うことに注目しながら、場に「いる」ことが生み出す変容について考える。

2-5-1. 私の感動の意味

2-2で述べたように、普段の安達さんの語りは、ところどころ主語や目的語が抜けているので理解しづらい。逆にいえば、安達さんの語りは述語的である。それは、安達さんにとって、「誰が」や「何を」が重要な問題ではないことを示唆している。つまり安達さんは、自他が明確に分離されていないノエシスの世界を生きていると考えられる。安達さんが生きる世界の自他未分性の程度は、安達さんが置かれているその時々状況と関係している。安達さんが、転居先のアパートを見つけられず、自身の不

安や不満を若い参加者の進路にますます反映するようになったことは、自身の未来の不透明性が、安達さんの自他未分性を強めていることを示唆している。

一方、ここでの安達さんは、「俺の場合は〔資格を〕取りたくても取れなかったんだ」、「だから俺は、資格が取れる学校にいるんだったら、取った方がいいよって言うんでな」と、「俺は」という主語を語った。主語を語るということは、自他のノエシスがノエマ的に個別化されていることを意味する。この場面で私が驚いたのは、普段と異なり、安達さんが自他を明確に分離して語ったためである。

このようなノエマ的個別化は、安達さんの語りの内容だけではなく、それを支える安達さんの表情や振る舞い、雰囲気の中にも見出される。例えば、安達さんの目が「聞いている相手を捕えるような鋭い目ではなく、逸らす隙があるが、だからこそ逆に見つめたくくなるような朗らかな目」だったことに注目しよう。「聞いている相手を捕えるような鋭い目」とは、2-4-1で考察したように、私として生み出されるべきはずのノエシスを「捕え」、ノエシスの分化を妨げるような目である。

一方、ここでの安達さんの目に対して、私はそこから目を「逸らす隙」を感じている。「隙」は、安達さんが語り始める以前に私が感じている、安達さんに「口を挟めるようになった」という「余裕」と対応している。「隙」や「余裕」は、未分化なノエシスが自他に分極化することで生じた両者の「間」や「綻び」を意味する。つまり、前節までの議論を踏まえるならば、ここでの私は、私と安達さんが同じ一つの「場」にともに「いる」ことを実感しているといえる。私は、「安達さんに出会い直したような気」がするという仕方で他者のノエシスを感じ、同時に「私自身が、ほんの少しだけれど、奮い立たせられる」、すなわち勇気づけられるという仕方で自己のノエシスを感じている。私の感動は、このような自他がともに「いる」ことの同時的、等根源的な実感を意味している。

2-5-2. 過去と未来を生み出す「あいだ」

他方、ここでの私は、私と安達さんがともに「いる」ことを実感すると同時に、それぞれの現れ方の変容を経験している。すなわち、「安達さんに出会い直したような気」がしたことは、私にとっての安

達さんの現れ方の変容を、私自身が「奮い立たせられ」たことは、私にとっての私自身の現れ方の変容を表している。このように、「あいだ」からそのつど生み出されるノエシスの感受は、自他の現れ方の変容を伴う。

変容は、過去から未来へ（あるいは未来から過去へ）という時間的な幅を含む。この幅は、自己が絶えず「あいだ」から生み出されて新たに自己になるという意味での、「自分自身との差異」（木村2001b、62頁）に由来する。その意味で私が「いる」ところの現在、ある一時点ではなく、常に幅をもっている。すなわち「いま」は、「未来と過去をそれ自身から生み出す根源という意味で未来と過去のあいだである」（同、167頁、傍点原文）。したがって、前述した私にとっての安達さんと私のそれぞれの現れ方の変容に、未来と過去の生成をみることができる。紙幅の都合上、以下では「安達さんに出会い直したような気」がしたことについて検討する。

安達さんと「出会った」のではなく「出会い直した」私は、純粋な現在そのものではなく、過去の安達さんとの関わりの記憶との連続のなかで、安達さんとの現在を生きている。このとき、過去が現在を規定すると同時に、現在がそのような過去を析出するという仕方、両者はノエマとノエシスの関係にある。私が確かに経験してきた過去は、ノエマ的自己の「歴史的な同一性として保持され」（同、197頁）でおり、そのつどノエシスの生成に伴って析出される。つまり、自他のノエシスを実感した私は、同時に過去が現に析出されていることを実感している。私が、「気」すなわちノエシスを、「安達さんに出会い直したような」と形容したのは、このように過去が現に析出されていることを表現するためだった。エピソードでは描かれていないが、ノエマ化がさらに進行したとき、安達さんや過去の安達さんとの関わりは、私において、それまでとは異なる仕方では表現されるはずである。

また、安達さんの現れ方の変容は、過去だけではなく未来へも向けられている。絶えず私に現れる安達さんに対して、私は常に出会い、私の自己を実現し続けている。そのため、安達さんの現れ方の変容は、私の安達さんとの出会い方の変容、すなわち安達さんに対する私の自己の実現の仕方の変容である。ノエシス的自己がノエマ的自己によって自己限定される以上、絶えず析出される過去は、未来の他

者との出会い方や自己実現の仕方を規定する。「安達さんと出会い直した」という表現に、過去の布置と未来の引き受け方の双方の変容が含まれていることは、そのまま「あいだ」から過去と未来が等根源的に生成されることを示している。

このように、場に「いる」ことは、絶えず過去と未来を生み出すという仕方、自他のあり方が変容する過程である。その意味で場に「いる」ことは、1－1で述べた、人が「自ずと回復」する過程そのものである。私たちは、他者を介して「あいだ」を触知することで、自己が「いる」ことを確かすると同時に、絶えず過去を析出し、未来を規定している。絶えざる過去の析出とは、過去の出来事の布置の変容である。エピソードで描かれた安達さんの語りの変容も、このように新たに析出された過去の表象であるといえる。他方、絶えざる未来の規定とは、自己が未来を引き受ける仕方の変容である。エピソードのなかで私が「奮い立たせられ」たのは、到来する未来を引き受けるという自らのあり方を確かにしたためである。

このように私たちは、他者を介して「あいだ」に触知し、自他がともに「いる」ことを等根源的に実感すると同時に、過去と未来を等根源的に生み出す。そうだとすれば、生成される過去と未来は、原初的段階では自他未分である。この自他未分性は、気分的に感受される。ここに、他者の経験を分有することと、未来を他者とともに引き受けていくことの可能性がある。

3. おわりに

本稿では、路上生活者と筆者を含むボランティアとの関わりを、「あいだ」に根差して描いてきた。「あいだ」からそのつど生成されている私たちの自己は、絶えず自己でなくなる可能性を孕んでいる。しかし、だからこそ逆説的に、他者との関わりのなかで自分が自分であることを確かにすることが可能となり、その果てに人が自ずと変容し回復することが可能となる。

ただし、このように自己を確かにする媒介となる他者は、必ずしも、本稿で描いてきたように、人間であるとは限らない。また、他者を媒介として自己を確立するという構造自体が、極めて限定的な人間を対象としていると考えることもできる。このよう

に、本稿では描ききれなかった場に「いる」ことのあり方を探ることが、今後の課題である。

最後に、これまであまり触れてこなかった、安達さんにとっての場に「いる」ことについて述べておきたい。4年前、安達さんが、入居して早々にアパートから公園に戻ってきたのは、安達さんがアパートに「いる」ことができなかったためだと考えられる。私たちは、単なる「もの」としての空間に「いる」ことができない。私たちは、他者との出会いを介して「あいだ」を触知することで、自己と他者とがともに「いる」ことのできる「場」を生み出す。他者との関わりに乏しいアパートでの一人暮らしが、安達さんにとって、自身が「いる」ことのできる「場」として生み出されなかったことは想像に難くない。

2-5-1で述べたように、安達さんは、自他が明確に分離されていない世界を生きていると考えられる。ただしそれは、安達さんの恒常的性質ではなく、安達さんが置かれている状況（例えば、転居先のアパートが見つからないという状況）と関係している。先行きが不透明な状況下で、安達さんは自他未分性を強める。自己が自己であることが揺らぐ時、安達さんにとって自らの過去は自らの過去ではなくなる。その時、まるで自らの本当の過去を取り返そうとするかのように、安達さんは若い参加者の進路に没入することになる。

その後、「寮」に入居した安達さんは、先行きの不透明性が一旦解消されたため、自他未分性を弱めた。安達さんが「俺は」という主語を用いて自らの過去を語ったことは、この時の安達さんが自らの過去を自らの過去として引き受けていることを意味する。他方、本稿執筆時点での安達さんは、「寮」での暮らしを「居候みたいだ」と不満げに語る。安達さんによれば、「寮」では、食品や日用品が現物で支給されるため、自分で自由に生活することができないのだという。

安達さんが自他未分の世界を生きているのだとすれば、「居候」は、自己が「いる」ことが不確かな安達さんの存在様態そのものでもある。そうだとすれば、安達さんはどこにも「いる」ことができないのだろうか。ここで、2-4の【気づまり】を思い出そう。真っ直ぐに私に語りかけていた安達さんは、青杉さんの声を受けて安心したかのように笑った。それは、自他を分け隔てる青杉さんの「流れる

ような声」が、安達さんの自己実現を可能にし、ともに「いる」ことのできる「場」を生み出したためである。安達さんは、多様なボランティアとの関わりを介して、自己を自己として維持し続けている。その意味で安達さんは、安達さんなりの仕方、他者との関わりを必要としている。

注

- i 「気分」や「ノエシス的方向性」の直接性と「あいだ」の間接性とを明確に区別するため、隠喩的ではあるが、「触知」という表現を導入する。
- ii エピソード及び手記に登場する人物名や地名等は、すべて仮名である。エピソードや考察内での「私」という一人称表記は、筆者自身を指すものとする。会話文中の〔 〕は筆者による補足を示す。なお、路上生活者の安達さんと手記提供者の山上さんからは、直接口頭で執筆の許諾を得ている。エピソードに登場する他の参加者についても、可能な限り直接許諾を得るよう努めた。
- iii この手記は、安達さんとの出会いから約1ヶ月後、山上さんがその時の感想を個人的に綴ったものである。筆者は、同じ参加者としてそれを読ませてもらった。本稿の主題は、そこで得た着想に大きく依っている。紙幅の都合上、実際の手記の一部を省略した形で、山上さんの許可を得て本稿に掲載している。
- iv 自己を自己として実現することは、未来が「^{きこ}将来^{きた}」として「到来」（木村 2001b、192頁）することである。安達さんにとって、先行きが不透明な状況は、未来を将来として実現していくことを困難にする。それは、自己を自己として個別化することが困難になることである。

引用文献

- 岩田正美「近年の貧困の特徴と制度対応」日本社会福祉会
〔ほか〕共編『「震災」「虐待」「貧困・ホームレス」「地域包括ケア」をめぐって』中央法規出版、2013年、130-141頁。
- 岩田正美『貧困の戦後史——貧困の「かたち」はどう変わったのか』筑摩書房、2017年。
- 木村敏『木村敏著作集1』弘文堂、2001年a。
- 木村敏『木村敏著作集2』弘文堂、2001年b。
- 熊倉陽介、森川すいめい「ハウジングファースト型のホームレス支援のエビデンスとその実践」稲葉剛・小川芳範・

森川すいめい編『ハウジングファースト——住まいからはじめる支援の可能性』山吹書店、2018年、20-47頁。

熊倉陽介・清野賢司「どうして住まいの支援からはじめる必要があるのか——ホームレス・ハウジングファースト・援助希求の多様性・つながりをめぐる支援論」松本俊彦編『「助けて」が言えない——SOSを出さない人に支援者は何ができるか』日本評論社、2019年、194-206頁。

村上靖彦『自閉症の現象学』勁草書房、2008年。

山田壮志郎「生活困窮者と地域生活の持続可能性」山田壮志郎編著『ホームレス経験者が地域で定着できる条件は何か——パネル調査からみた生活困窮者支援の課題』ミネルヴァ書房、2020年。